

## 9月27日「強くなれる理由を知った！」エフェソ3:14~21

今日一緒に聴いたエフェソの信徒への手紙にはこんな言葉があります。3:1「こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているわたしパウロは……」この手紙がパウロ自身の手によるものか、パウロの弟子によるものかは議論があるようですが、「キリスト・イエスの囚人となっている」と書かれている通り、確かにパウロはイエス・キリストを多くの人に伝えたために、何度も牢屋に入れられ、命の危険を味わいました。けれどもパウロの手紙にはあまり悲壮感はありません。それどころか、牢屋に入れられていることなど感じさせないほど、力強く、前向きで喜びに溢れています。「わたしたちは主キリストに結ばれており、キリストに対する信仰により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます。だから、あなたがたのためにわたしが受けている苦難を見て、落胆しないでください。この苦難はあなたがたの栄光なのです。」パウロにはキリストに結ばれているという確信がありました。そして、キリストを通して、教会の仲間たちと深く繋がっている確信があったのです。だからパウロは大きな苦難の中にあっても、悲嘆にくれて諦めることも、打ちひしがれて挫けてしまうこともありませんでした。「この苦難はあなたがたの栄光なのです！」そう喜んで、むしろ人々を励まし続けました。そうして多くの手紙が聖書に納められることになったのです！

パウロの数々の手紙は私たちに教えてくれます。信仰には力があることを。どんな力でしょうか？権力ではありません。財力でもありません。武力や知識の力でもありません。それは「希望する力」です。どんな絶望的な状況にあっても、どんな困難な状況にあっても、神が私たちのすぐ近くにおられる、そのことを信じて、希望をもって歩み通す力です。わたしたちの内に働く神の力は「20節 わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えて」いるのです。

宗教改革者ルターにこんな逸話があるそうです。ある日ルターがとても暗い顔で帰宅しました。それを見た妻のケーテは喪服を着て、ハンカチで涙を拭って、悲しみの表情を浮かべました、ルターがそのわけを聴くと妻

はこう答えました。「マルティン、御覧なさい。私たちの愛する神がお亡くなりになったのです。それでとても悲しんでいるのです」つまり、キリスト者が絶望的になるということは、神の死に他ならない、と彼女は夫の不信仰を論じたのです。真面目に生きることは本当に大切なことです。けれども物事を深刻にとらえすぎるのも考え物です。私たちが絶望して、自分の価値を信じられなくなる時、希望を失ってしまう時、それは神の存在を否定することなのです。ルターはこんなことも語っています。「キリスト者は心朗らかな人間でなければならない。さもなければ、彼は悪魔から誘惑されているのだ」

ところで、聖書の中で、イエスが弟子たちを励ますために何度も語られる言葉があります。「**恐れるな!**」船が嵐に見舞われ、今にも転覆しそうになったとき、不安がる弟子たちに言われます。「**安心しなさい、私だ、恐れることはない**」復活されたイエスに出会い、怯える弟子たちに言われます。「**恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。**」どうしてイエスは「恐れるな」と言われるのでしょうか。「わかるよ、びっくりするよね」ではだめなののでしょうか？もし船が転覆しそうなら、もし死人が生き返ったなら・・・弟子たちが恐れるのはいたって普通のことだとも思えるのですが・・・それは「恐れ」は人を愛から遠ざけるからです。

私たちが今も直面しているコロナ禍の中で「自粛警察」ということが言われました。恐れは私たちをひどく攻撃的にして、私たちの心を蝕んでいきます。もちろん感染症ですからきちんと予防をして、適切に恐れなければなりません。けれども度を越えた恐れは極端に他者を遠ざけるのです。だからイエスは言われます「**恐れるな!**」。そして恐れ代わりに身に着けるものがあることを教えてくれます。それが「愛」です。今日の御言葉です「16節 どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、**力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者**」

としてくださるように。」この愛の力が、私たちを私たちの思いをはるかに超えた働きへと導き、強めてくれるのです。

そろそろ9月が終わり、この2020年度も半年を終わります。ふと振り返ってみるとコロナ禍に振り回された半年であったように思います。4月の終わりに、礼拝の休止を決めた時、私の心を占めていたのは大きな恐れでした。「ただでさえ高齢者が多いのに、皆から教会に行く習慣が失われたら二度と戻らないかもしれない」「このまま皆が教会のことを忘れてしまったらどうしよう!？」正直に、私が不信仰であったことを告白します。とんでもない勘違いでした。そんな私にとって先週、高齢者祝福式を皆さんと迎えられたことは、神さまからの戒めと祝福であったように思います。「恐れるな、愛せよ！」そう神さまから命じられている思いがしました。私たちはコロナで人に直接会うことが不自由になりました。そのことは私たちにとって大きなストレスです。皆で集まることには危険が伴うと言われてしまうと、教会の未来も見えない気持ちにさせられます。けれども今日もあったようにパウロは多くの手紙を牢屋から書きました。まったく不自由な中で書かれたものですが、それは空間の制約を超えて世界中に広がり、時間を超えて現代の私たちにまで届けられた、人を生かす、愛の手紙でした。パウロの不自由さに比べたら、コロナ禍の私たちなどものすごく自由な存在です！今日の御言葉も伝えます。「**信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住ませ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。**」私たちは失望し、元気を失っている時ではないのです。そんなことを思いながら、先週出席できなかった施設におられる方々への手紙を用意しました。署名頂ければ幸いです。この時にこそ、私たちが愛に根差し、愛にしっかりと立つ者となるチャンスなのです。権力は失う日が来ます。財力は無限には続きません。武力も知力もいつかは衰えます。けれども、私たちが信仰者である限り、私たちから希望する力は絶対に失われません。「**あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超**

えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように！」